

PL データで患者に寄り添う療養支援への歩み

小出 景子

永寿総合病院 糖尿臨床研究センター

糖尿病患者とじっくり時間をかけて話したのは、J-DOIT3に関わった時であった。その中で、糖尿病療養の難しさを知るとともに、血糖変動とその背景にある食事、運動やストレスとの関連に関心を深めた。ADRR (average data risk range) をはじめとした血糖変動指標の臨床上の価値を確認すると共に、データマネジメントソフトの療養支援上の活用を考えて試した。薬剤師としては、SMBGの結果と処方薬を合わせて効果を説明し、副作用予防にも活かせる、データに基づく薬剤管理の可能性を、2011年に『活かそうSMBG!』に著した。その後、血糖データ活用の一環として、SMBGやその後のCGMのデータ、歩数や写メ利用などによる食事の取り込みと突合できる統合ソフト開発に関わり、データレポートを患者に提示する重要性を認識した。

データマネジメント支援を行ううちに、データ量が多く、治療モチベーションが高い1型糖尿病・インスリンポンプ指導に力を注ぐようになった。同時に、院内でのCSIIの外来導入の確立に努めた。CSIIのデータマネジメント指導では、より広い治療ノウハウやトラブルシューティング共有の必要性を感じ、多くの先生方の協力を得て、2016年にSCC (SAP、CSII、CGM) 研究会を始めることが出来た。同研究会は『安心してインスリンポンプ使用のエッセンス』を2018年に発刊した。rtCGM、isCGMの出現により、データマネジメントが大きく変化する過程で、安全使用のために値の相関を確認し療養指導へ活かした。SMBG、SAP、CGM、CSIIの実践から、血糖データと生活内の変動要因を突き合わせる患者指導を、データマネジメントシステム指導 (DMS指導™) として発案し改良を続けてきた。DMS指導はCDEJのガイドブックである『糖尿病療養指導ガイドブック』に掲載された。DMS指導を行う際に、患者アプローチに必要と考え、SMBG 2 Days、低血糖対応記録などの資料を作成し臨床研究にも利用した。

CGM、SAP、アプリなどの急速な進歩を受けて、より広い先生方の協力を得て、2020年に『いま読んでおきたい! 血糖データの活かし方』を編著し刊行することが出来た。

今後も、DMS指導を基本に患者に寄り添う療養支援を進めていきたいと考えている。

本学術集会が、これまで関わった全ての患者さん、医療者の方々、SCC研究会や本学会のリーダーの方々に支えられて開催に至ったことに深謝いたします。

略 歴

- 1983年 明治薬科大学薬学部製薬学科卒、台糖ファイザー株式会社 入社
- 2000年 調剤薬局勤務
- 2009年 東京都済生会中央病院 糖尿病臨床研究センター 臨床研究助手
- 2013年 永寿総合病院 糖尿病臨床研究センター 療養指導主任
- 2018年 永寿総合病院 糖尿病臨床研究センター センター長補佐、現在に至る

資格：研究認定薬剤師、日本糖尿病療養指導士、糖尿病薬物療法認定薬剤師

学会・研究会関連：SCC研究会代表世話人、日本糖尿病インフォマティクス学会設立時社員、日本糖尿病学会CGM適正使用委員会委員、東京都糖尿病協会理事、日本くすりと糖尿病学会教育研修委員会委員、DiaMATネットワーク委員

執筆：『活かそうSMBG!』、『安心して「インスリンポンプ」を使用するためのエッセンス』、『いま読んでおきたい! 血糖データの活かし方』

受賞歴：日本糖尿病学会第一回医療スタッフ賞